

オタマジャクシはカエルの子

鎌倉時代の随筆「徒然草」(つれづれぐさ)では、「つれづれなるままに、日暮らし、硯(すずり)に向かひて、心にうつりゆくよしなしごとを、…」でしたが、今の私は、「つれづれなるままに、机の上のパソコンのウィンドウを開いて、あれやこれやと検索して時間を過ごします...」。そんな時に、「リパブリック賛歌とその替え歌」に当たりました。南北戦争時代のアメリカの民謡に「リパブリック讃歌」がありますが、(大分昔、カントリーミュージシャンのタミー・ワイネットの歌で感銘を受けた思い出もあります...) アメリカに限らず世界中で様々な替え歌も作られ、多くの人々に親しまれているそうです。日本では「お玉じゃくしは蛙の子」「権兵衛さんの赤ちゃん」などがその代表格で、皆様も曲の一部を聴けば思い出されるはずです。私たちが子供のころに歌ったのは、戦前の1940年に発表された(永田哲夫・東辰三作詞、灰田勝彦歌唱)『お玉杓子は蛙の子』に由来しているようです。



1. おたまじゃくしは 蛙の子 なまずの孫では ないわいな
それがなにより 証拠には やがて手が出る 足が出る
2. でんでんむしは かたつむり さざえの孫では ないわいな
それがなにより 証拠には つほ焼きしようにも ふたがない

元ネタはハワイ民謡ですが、間奏にリパブリック賛歌のフレーズが入っていたために、歌詞自体も本曲の替え歌として歌われていった経緯があるとのことでした。

続いて、田原総一郎>田中角栄元首相>人たらし術>... を検索してみました。

田原氏の解説を待つまでもなく、「田中角栄」は、内閣総理大臣(第64・65代)、自民党内最大派閥の田中派を率い、日本列島改造論を計画・実行し、日中国交回復を実現したことで知られ、多大な影響力をもった政治家といわれています。「いい意味でも悪い意味でも、極めて日本的な政治家でした。…頭もいい。理解力に優れている。それに人の気持ちをつかむ感性にも優れている…」 「田中角栄の人たらし術... 彼は、官僚の名前、誕生日、出身地まですべて頭に入っていたといえます。…陳情に来た人すべての話を聞き、帰るときには玄関まで見送りに出たそうです... 地元新潟のおばあちゃんが一人でやって来た時も、話を聞いた後、見送りに出ます。」「おばあちゃんの見送りぐらい秘書がやるから、と言うと、あのおばあちゃんは、地元に戻って『角栄が自分のためにわざわざ見送りに出た』と、近所の人たちに吹聴するだろう。俺のかわりに票を集めてくれるんだ。政治家にとって、それがどれだけ大事なことかわからないのか! 田中さんは一喝したというんですね...」



ちなみに、娘の田中真紀子さんは、私と大学・学部・学年も一緒でした。当時は母親似の華奢な帰国子女でしたが、その後は「蛙の子は蛙」?、度胸も体躯も父親譲りの女傑で、外務大臣も務めたことは皆さまもご周知のこと...